

記憶の場所 — ショア記念館（パリ）を中心として

松岡 智子

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2014年10月1日 受理)

はじめに；「名前の壁」

第二次世界大戦中にナチス・ドイツが設置したポーランドのアウシュヴィッツ収容所の解放60周年を迎えた2005年は、年頭から世界各地で目白押しに記念式典や会合が催された。1月24日、国連総会は特別会合を開き、アナン事務総長は冒頭の演説で「このような悪を二度と起こさせてはならない」と強調した。総会がホロコーストをめぐる特別会合を開いたのは初めてのことである。

続く27日、同収容所に隣接し「第二アウシュヴィッツ」と呼ばれるビルケナウ収容所跡地の、欧州各地からユダヤ人らを輸送した鉄道引込み線のある場所に建立された慰霊碑の前に、ロシアのウラジミール・プーチン大統領、イスラエルのモシェ・カツァブ大統領、ドイツのホルスト・ケーラー大統領、フランスのジャック・シラク大統領、アメリカのディック・チェイニー副大統領をはじめとする45か国の首脳や生存者、遺族、解放者たちなどが参列し、記念式典が開催された。そして、同じ日にパリ4区のマレ地区でショア記念館(註1)が開館し、一般公開された(図1)。

開館に先立ち23日日曜日には、記念館の広場に新たに設置された巨大な「名前の壁」の落成式が行われ(図2)、ショア記念財団の会長で欧州議会の元議長であるシモーヌ・ヴェイユ(註2)や、「フランス被追放ユダヤ人子息子女協会」会長のセルジュ・クラルスフェルト、また、同記念館総裁のエリック・ド・ロスチャイルドが挨拶を行った。イスラエルの石で作られたこの壁には、1942年から1944年の間にホロコーストで亡くなったフランス在住のユダヤ人約7万6千人の氏名がアルファベット順に刻まれ、そのうち1万1千人は子供たちであり、彼らの多くはアウシュヴィッツ＝ビルケナウに送られ、生還し



図1 ショア記念館の正面

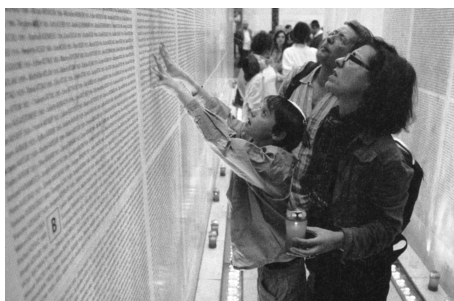


図2 「名前の壁」

たのはわずか2,500名ほどであった。この日、それぞれの近親者の名前を確認するため、2,000名以上のホロコーストの生存者や遺族たちが記念館につめかけた。また、25日には同記念館の開館式が行われ、シラク大統領が演説を行った（註3）。

本稿では、これまでわが国の博物館研究では詳細に取り上げられなかったショア記念館の概要と設立までの経緯をたどり、付録として、設立に深く関与したシラク大統領による、開館式における演説の邦訳を掲載する（註4）。

1. ショア記念館の概要

筆者は2014年3月、パリのメトロ1番線のサン・ポール駅を下車し、セヌ河畔近くのジェフロワラズニエ通り17番地にあるショア記念館を訪れた。同じマレ地区にあるユダヤ芸術歴史博物館（註5）のように、入り口での厳重な荷物検査を通過すれば、記念館の建物の前の広場に入ることができる（図3）。広場には、絶滅収容所の煙突を象徴するかのような1つの大きなブロンズの円筒が



図3 ショア記念館の広場

あり、そこにはナチスが設置した各地の強制収容所の地名が記され、右奥には7つのレリーフがある。また、左奥には、開館式に先立って公開されたあの「名前の壁」が高くそびえ、年代順・アルファベット順に名前をたどると、最新のものとして2013年6月に刻まれた氏名を発見し、犠牲者の検索が今なお続いていることを知る。

ショア記念館は地下1階と地上5階のシンプルな外観の建物であり、入場料は無料であるが、ユダヤ芸術歴史博物館を訪れた時のように、1階の受付の女性に「どこの国から来たのか」と聞かれたため「日本から」と答えると、それ以上、質問されることもなく見学を開始する。1階にはマルチメディア教育センターがあり、多くの貴重な資料を備えており、コンピュータで自由に検索することができる。そのなかには証言者の映像記録があり、スティーヴン・スピルバーグが設立した財団が作成したものも含まれている。また、ワシントンのホロコースト記念館と共同で製作された、マルチメディアによるホロコースト百科事典や、映画、ドキュメンタリー、音楽、ラジオによる音声資料等もある。

この階には、ホロコーストや、ナチズム、レジスタンスをテーマとした歴史・社会学・心理学関係の学術書や、証言、エッセイ、伝記、そして、ユダヤ人の歴史や文化に関する豊富な書籍やDVD、CDを販売するコーナーもあり、早速、記念館刊行の推薦図書を購入する。コーナーの片隅には、飲み物の自動販売機1台とソファがあるだけの簡素なカフェ・スペースも設けられている。

地下1階には常設展示室、子供記念館、講堂がある。常設展示室では、写真や文献、新

聞記事、フィルムなどに基づき、第二次世界大戦中のフランスにおけるユダヤ人の歴史を時系列的に紹介しており、縦縞の囚人服や使用された食器、家族宛の手紙などのほか、アウシュヴィッツに向かう移送列車のルートマップ、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ第二収容所内の地図も展示されている。また、ビデオ・スペースでは生還者たちの証言フィルムが、レジスタンス運動を紹介するパネルや「正義の人」の証言とともに放映されている（註6）。

常設展示室は子供記念館（図4）と称される暗く狭い空間に続き、内部は、犠牲になった3,000人ほどのユダヤ人の子供たちの写真が、氏名のアルファベット順に、隙間なく壁面を覆い尽くしている。これらの写真の多くは、セルジュ・クラルスフェルトやホロコーストの遺族たちによって集められたものであり、失われた個々の人生の重みと残された者たちの執念に圧倒される。

階段で地下中1階に上がると、「クリプト」（crypte）と呼ばれる礼拝堂（図5）に到着する。ともされた炎によって、ダヴィデの星をかたどったエルサレム出土の黒大理石が、薄暗がりから厳粛に浮かび上がり、その中央に、各地の絶滅収容所やワルシャワ・ゲットーから収集した死者たちの灰が納められた。それは、葬儀もされずに亡くなった600万人の犠牲者を象徴する慰霊碑であり、礼拝堂の天井がそのまま地上の広場の「煙突」へと吹き抜け、誰もが追悼の祈りを捧げずにこの場を去ることはできないだろう。「クリプト」の仕切り壁には、遺族の求めに応じて、すべての国のホロコーストの犠牲者たちの名前を記載した名簿が保管されている。

礼拝堂の入り口の解説文には、1995年7月16日、50年間の沈黙と忘却ののち、ジャック・シラク大統領が演説のなかで、第二次世界大戦中、フランスに在住していたユダヤ人に対してドイツ占領軍が行なった犯罪に、ヴィシー政権が加担したことを正式に認めたことが記載されていた。また、この階にはワルシャワ・ゲットーの立体模型（図6）や、フランス国内のロワレ県のポーヌ＝ラ＝ロラ



図4 子供記念館



図5 「クリプト」

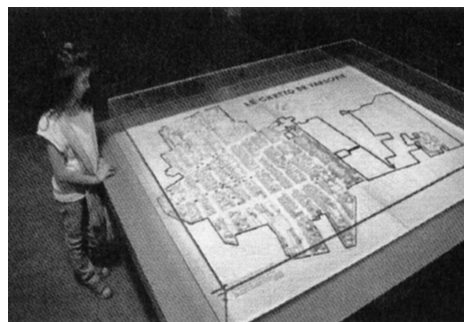


図6 ワルシャワ・ゲットーの模型

ンド中間収容所の第6バラックのファサード(図7)も設置されている。このファサードは、ヴィシー政権がフランス在住のユダヤ人を強制収容した証拠として、セルジュ・クラルスフェルトをはじめとする犠牲者の遺族たちから、この記念館に寄贈されたものである。

また、「クリプト」の前には「ユダヤ人登録カード」(註7)の部屋(図8)があり、その入り口には、1997年12月5日、シラク大

統領は、カトリーヌ・トスカ文化・コミュニケーション大臣とともに、パリの国立公文書館に保管されていた「ユダヤ人登録カード」をこの場所に預けたと記され、来館者はそれらをガラス越しに見ることができる。

3階は記念館による教育普及活動のための教室があり、生徒たちが、講義、展示、証言者を通じてホロコーストの歴史を学び、記念館が企画する視察旅行に参加することができる。また、教員向けの講座や7歳から12歳までの子供たちのアトリエもある。4階には会議室及び事務室が設けられているが、関係者以外入ることはできない。

5階最上階には、現代ユダヤ資料センター(CDJC)が開設されている。ドイツ軍による占領下のフランスをはじめとしてヨーロッパのユダヤ人に関する2万5千冊の書籍、5万冊の定期刊行物、6万枚の写真とポストカード、3千枚のポスター、また、ヴィシー期の公文書も保管され、学生や研究者はそれらを閲覧することができる。CDJCは1956年、マレ地区に設立された無名ユダヤ人犠牲者記念館内に設置されたのち、2002年より3年間の拡張工事を経て現在の記念館に生まれ変わり、ワシントンのホロコースト博物館(1993年設立)と2005年にリニューアル・オープンしたエルサレムのヤド・ヴァシェム(註8)と並び、ヨーロッパで最も規模の大きな、ホロコーストの歴史に関する資料保存と研究のための機関となった(註9)。

2. 設立の経緯

先に挙げたパリのショア記念館内のCDJCの起源は、第二次世界大戦中、1943年にさかのぼる。イサック・シュネルソン(Isaac Schneersohn, 1879 - 1969)が、戦後裁判を起こすために必要なユダヤ人迫害の証拠の収集を目的として、同年4月、仲間とともにゲルノーブルに創設し、のちに本格的なホロコースト記念館の設立を考案した。シュネルソ

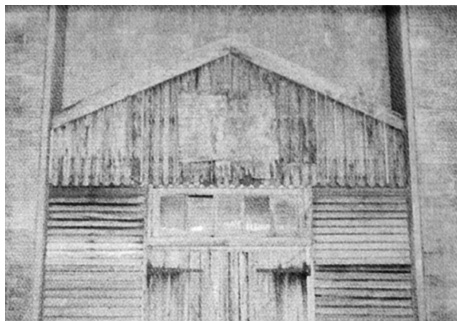


図7 ポーヌ＝ラ＝ロランド中間収容所の第6バラックのファサード



図8 「ユダヤ人登録カード」の部屋

ンについては、シラクが2005年の開館式の演説のなかで、「大惨事の渦中にあってもなお記録を残そうとした歴史家」、「真のレジスタンスを成し遂げた人物」として称えている（註10）。

その一方で、ほぼ同時期、イスラエルにおいても非宗教的施設としてヤド・ヴァシエムが作られる計画がもちあがり、1942年には、ロシア生まれでキブツ活動家のモルデカイ・シェンハビがナチスの犠牲者のためのメモリアル建設を提案し、合わせてホロコースト関係の一切をヤド・ヴァシエムの独占管理下におくべきであると主張した。その後、シュネルソンを中心とするホロコースト記念館建設計画を知り、ベン＝グリオン首相とモシェ・シャレット外相の支持を得て、「パリにエルサレムの地位を与えようとする」この計画を潰しにかかった。互いの交渉は難航したが、ヤド・ヴァシエムが、パリ記念館建設に50万ドル供与するようにユダヤ団体連合体である請求会議に推薦する代わりに、パリ記念館側は今後一切資金調達活動をする権利を放棄するという約束が成立した。その50万ドルはドイツ賠償金から支払われるもので、もし、シュネルソンが約束を破ったら、ヤド・ヴァシエムは彼を潰す「公然たる戦争」を仕掛けると威嚇したのである（註11）（図9）。



図9 ヤド・ヴァシエムの最初の記念碑（1953年）

1953年5月27日、フランス最大のユダヤ人コミュニティを有するパリのマレ地区に、ホロコーストの犠牲となったユダヤ人の慰霊碑が初めて設置された（図10）。そして、1956年10月30日、無名ユダヤ人犠牲者記念館が開館し、世界各地から代表団が訪れた。また、この場所をさらに象徴的な空間にするため、各地の収容所やワルシャワ・ゲットーから集めた灰にイスラエルの大地の土を混ぜたものを、翌年2月、礼拝堂に納めている。



図10 1953年5月27日、無名ユダヤ人犠牲者の最初の記念碑がパリのマレ地区に設置された。

パリのホロコースト記念館構想が実現に向けて本格的に動き出すのは、ほぼ40年後、1995年にシラク大統領の演説が行われてからである。同年7月16日、ヴェル・デイヴ〈冬季競技場〉（註12）があった場所で、53周年の日、第二次世界大戦中、フランス在住のユダヤ人に対し行われた犯罪に国家が加担したことを、歴代の大統領のなかで初めて認めたことから、ユダヤ人からの財産略奪を調査し、被害者へ賠償を提示するための委員会である、マテオリ委員会の設立が決定された（註13）。マテオリとは、レジスタンス運動家で強制収容所からの生還者であり、フランス経済社会評

議会議長のジャン・マテオリのことであり、彼が委員長に命じられた。委員はマテオリ氏を含め8名で構成され、そのひとりが医師であり、万国イスラエル人同盟議長のアディ・ステッグ氏であった。マテオリ委員会が設立された1997年の7月20日、リオネル・ジョスパン首相は声明を発表し、シラクと同様、過去の真実を「記憶する義務」と訴え、ユダヤ人の移送におけるフランス人の責任を認め、ホロコースト記念館の設立を提唱した。また、同年10月3日、ジョスパンは、ヴィシー期の公文書を研究者の利用に供する通達を出した。

1997年12月15日、シラク大統領は「ユダヤ人登録カード」を、無名ユダヤ人犠牲者記念館の地下礼拝堂に奉納する行事に参加し、式典では「ユダヤ人の人口調査や登録カードの作成と同様に、収容所はフランス行政の責任下にあった」ことを再確認し、「過去を引き受けることは、未来を建設する手段を手に入れることだ」と言葉を続けた。ユダヤ人団体とも交渉し、国立公文書館は、大統領の賛成を得て、法的な所有権は保持しながら、無名ユダヤ人犠牲者記念館へ、「ユダヤ人登録カード」を出張展示することになった。

そして、マテオリ委員会が設立されてから3年後の2000年5月、報告書が提出された。調査グループの、工業、商業、サービス業といった経済の全部門と公共部門に及んだ報告書には、約5万人のユダヤ企業の「アリア人化」の影響、凍結された9万の銀行口座の状況、履行されなかった保険契約、家具の持ち去られた3万8千のアパートマン、収容所へ送られたユダヤ人から没収され貯蓄供託金庫に振り込まれた資金が明らかにされ、ユダヤ人家族に返還できるものはすべて返還された。

マテオリ委員会は財産の賠償のみならず、ホロコーストの歴史の記憶とその教訓を不朽のものにするための義務があることを強調し、公的および私的略奪資金のなかで、所有者や権利承継人がすでに死亡したために返還請求されないものを、ホロコーストの記憶保存のために設立される財団へ払い込むように国に求めた。財団が設立されると、リオネル・ジョスパン首相がシモーヌ・ヴェイユに財団理事長の就任を求めたのである(註14)。

3. まとめ：「正義の人の壁」

ショア記念館の外に出ると、隣接するもう1つの壁がある。この壁は「正義の人の壁」(図11)と呼ばれ、記念館開館後に新たにつけ加えられており、2006年6月14日にそのための式典が「クリプト」で開催され、エリック・ド・ロスチャイルド記念館総裁、バルトラン・デラノエ・パリ市長、イスラエルのエフード・オルメルト首相、フランスのドミニク・ド・ヴィルバン首相などが参加した(註15)。こ

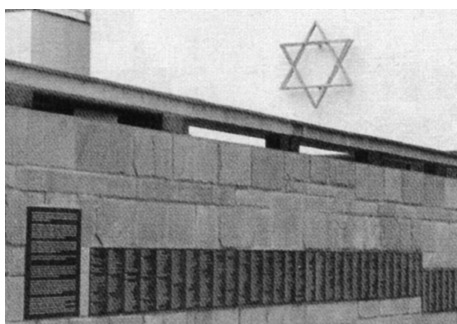


図11 「正義の人の壁」

の「正義の人の壁」には金属板が取り付けられ、第二次世界大戦中にかくまい、身分証明書を偽造し、食料を提供し、国境を越えさせることによって、当時、ヴィシー政府とナチスの占領によって絶滅の危機に陥った国内のユダヤ人の4分の3を救った、「正義の人」の称号をもつフランス人約3,400人の名前が刻まれている。

この称号は、第二次世界大戦中、ユダヤ人を救った非ユダヤ人に敬意を表してイスラエル国家から授けられるものであり、1963年以降、ヤド・ヴァシェムによって手渡されている。「正義の人の壁」の名前は、この称号を与えられた年ごとにアルファベット順に並べられている。

共和国大統領はヴェル・ディヴ事件の記念式典への参加依頼が来た時も一切躊躇せず、1995年7月16日、この事実を負う負債に時効がないことを明確にした(図12,13)。ヴィシー政権の実像については、国内よりも北米の歴史家によりすでに明らかにされていたが(註16)、多くのフランス人には深い衝撃を与え、その影響はシラク自身の予想をはるかに越えるものであったという(註17)。



図12 1995年7月16日、ヴェル・ディヴ事件の記念式典で演説をするジャック・シラク大統領

しかし、ショア記念館開館後、シラクは2007年1月18日、フランスの「正義の人」を称えるためのパンテオンの式典に臨み、彼らに敬意を表したのである。一緒に式に参列し演説を行ったヴェイユは、次のように述べている。「この日、1995年の大統領の演説へのある種の回答が与えられたのだった。だからこのような悔恨と崇敬の言葉を述べる人が1995年の演説を行ったその人



図13 ヴェル・ディヴ（冬季競輪自転車場）の跡地

であること、そして死と屈辱の暗闇にフランスの名において正義の人々の光を投げかけるのがこの同じ大統領であることが重要だったのだ」(註18)。

ショア記念館内の「名前の壁」と外の「正義の人の壁」はまさしく、第二次世界大戦中のフランス史の「闇」と「光」の象徴である。シラクは常に、「光であっても闇であっても国の歴史と向き合うことは、未来と向き合うことに等しい」という明確な論理を持ち続けた。記憶という義務を自ら背負った大統領にとって、歴史の「闇」と共に「光」にも向き合うことにより初めて、その義務は達成されたのではあるまいか。

〔付録〕

ジャック・シラク フランス大統領の演説

2005年1月25日（火）

パリのショア記念館開館式にて

ユダヤ人の受難を決して忘れないというフランスの誓いを改めて申し上げるために今日ここに来ました。ショアの犠牲者の前で敬意を以って拝礼し、我が国が阻止することのできなかったことを決して忘れないという誓いを改めて申し上げるためにここに来ました。

「思い出しなさい。忘れないで。」

Zakhor, Al Tichkah（註19）

動揺と黙想が、そして途轍もない悲しみと後悔が混じり合うこの場所で、ユダヤ教の核として位置づけられる必要不可欠なこの記録が、独特な反響を鳴り響かせています。

今朝、この記録が新たに我々を一つにします。証言する控えめな勇氣、記憶する謙虚な誇り、強く残る思い出、忘却への拒否は、この残虐行為で見られる最も根本的な失敗であります。

ショア記念館は、アンドレ・マルロー（André Malraux）氏が「潜んでいる我々の兄弟」と呼んだ人々のことを思い出させてくれます。

この記念館の開館は、ナチス恐怖の最も暗い時期から続く長い歩みの成果であります。忘れ去られる恐ろしい運命を約束された男性、女性、子供を乗せた移送列車が、毎日絶滅収容所に向かって加速していた時、これらの出来事・事件を記録し始め、資料を集め、記録文書を取りまとめなければならぬと、ある男は決心しました。いつの日か人権裁判所で証拠を提示し、歴史が下した判断の評価を落とすために証拠を積み重ねていったのです。

虐殺の容赦ない機械を目の当たりにしながら、その大惨事の中でメモを取り、資料や証言を集めました。以上のことは、イサック・シュネルソン（Issac Schneerson）氏の挑戦でありました。それは心打つ勇敢な行為を象徴し、歴史家の仕事を見事に証明しています。

1943年4月、グルノーブルに現代ユダヤ資料センターを建設し、シュネルソン氏は真のレジスタンスを成し遂げたのです。それは、記録での抵抗であります。もう、非力は軍事力よりも強く、道義は恥辱よりも偉大で、希望は恐怖よりも力強い。シュネルソン氏が、大虐殺の中で立ち上がった時にはすでに、人間の全ての尊厳が表されていたのです。イサック・シュネルソン氏は、残虐行為の官僚主義に対抗する精神のアーキビストでありました。

今日この記念館で展示されるまで、仕事をし続けた全ての人々に対して、ここで公式にそして親愛の情を込めて感謝を示したいと思います。この壁に記載された76,000人の名前は、傷ついた命に死後の尊厳を与えます。これは苦しめられた人々の消えることのない記憶であります。

親愛なるエリック・ド・ロスチャイルド（Eric de Rothschild）氏、この記念館のお陰であなたはただ存在することができるのです。そのことに心から感謝して下さい。そして、私の感謝の言葉の中に、記念館の館長であるジャック・フレディ（Jacques Fredj）氏を加えさせてください。彼の熱心な取組みが無ければ、この記念館を実現することはできなかったでしょう。

親愛なるシモーヌ・ヴェイユ（Simone Veil）氏にも同様に感謝申し上げます。ショアの記憶基金の会長を務め、このプロジェクトの着想を与えてくれました。あなたが我が国に与えてくれた全てのことに感謝致します。

親愛なるアディ・ステッグ（Ady Steg）教授にも感謝申し上げます。あなたの並外れた教養、知的・道徳的厳しさはこの記念館に威信と影響力を授けました。今日あなたへの感謝の言葉の中にもう一人の名前を加えたいと思います。その人はヴォルテール高校のフランス語教師であったビノン（Binon）氏です。あなたがジャケットの折り襟に黄色い星を付けて学校にやって来た時、彼はモンテスキューの「寛容」という素晴らしいテキストをクラスで取り上げました。

セルジュ・クラルスフェルト（Serge Klarsfeld）氏とリシャル・プラスキエ（Richard Prasquier）氏にも同様に感謝申し上げます。あなた方のような人々の寛容な献身に対して、また主宰される2つの団体「フランス被追放ユダヤ人子息子女協会」と「ヤド・ヴァシエムフランス委員会」での忍耐強い行動に対して、我が国が行わなければならない全てのことを考えます。

そして、正当な根拠なく今私が挙げなかった全ての人々に感謝申し上げます。彼らの取組み、才能、エネルギーがこの非常に大切な仕事の完成へと導いたのです。

今も歴史は我々の良心に付きまとい、常に我々に課題を与えます。

まず、その課題は真実を残す義務です。先ほど、深い感動でこの記念館を訪れた時、私はその簡素さが表す力に衝撃を受けました。名前・日時・数字・地図・事実が記載され、いくつかの写真があるだけです。他には何もありません。しかし、名前は我々を見つめ、注視します。事実は我々に語りかけ、呼び掛けます。

この真実とこれらの出来事を否定しようと望む者は、法律のあらゆる厳格さに以って、訴えられ、有罪となるだろうと私は公式に申し上げます。人種差別を合法化するために科学は歪められました。この真実に対する罪、すなわちナチスのショア否定論を正当化するため、科学が正道から外れることを認めることはないでしょう。

思い出すこと、それは同様に伝えることでもあります。歴史は常に語られなければなりません。その受け渡しは決して絶たれてはなりません。我々の子供や孫は、心の奥底で過去に起こったことを認識し続けなければなりません。その認識は苦痛のように胸を引き裂き、威嚇のようについて回るものでしょう。

私は全てのフランスの教師を頼りにしています。そして直接見て、理解し、忘れないよ

うに、生徒たちをショア記念館に連れて行くことを勧めます。ショアの記憶はただ地域社会のためだけの記憶ではありません。これは我々の共通の記憶なのです。記憶は国家にその歴史を思い出させます。クロード・ランズマン (Claude Lanzmann) の代表作「ショア」(註 20) がよく示しているように、運命の衝撃的な特異性を超えて、全人類のために、人間が人間に対して犯した罪を思い出す必要性をショアの記憶は表しています。

しかし、何よりも先に、記憶することと思い出すことは、慎重さと決意を必要とします。

非常に特別なこの機会に、フランスには反ユダヤ主義の場所はないことを厳粛に改めて申し上げます。反ユダヤ主義は思想ではありません。それは墮落です。人を殺す墮落です。それは悪の深層部に根源がある憎悪であり、その憎悪が再び現れることは許されません。これに関して、いかなる行動や発言も許されません。些細なことなどはないのです。文書・言葉・テレビ・インターネット・衛星によってその憎悪は外に現れることですが、その憎悪は認められません。現在、そしてこれからも政府は反ユダヤ主義根絶のためにできる全てのことを行っていきます。

記念館総裁殿、ご出席の皆様、

他人への拒否に対する闘いの中で、フランスは慎重な態度で妥協しないことを決心しているが、それはフランスがその歴史や過去の責任を全て分かっているからなのです。

この名前が記載された壁に向かう時、私は同様に「正義の人」たちのことを思います。彼らは我が国の良心であり、名誉であります。彼らのおかげでフランスにいた4分の3のユダヤ人の命を救いました。彼らの光、あの時代にノーと言った全ての人々の光が今日も我が国を輝かせているのです。

しかし、我々の歴史の中で最も暗い時期も私は忘れません。それは1995年7月16日です。1942年7月16日・17日に行われた大規模な一斉検挙の記念式典の時、フランスの名において、フランス人とフランス政府がドイツ占領軍の犯罪の狂気を支援したことを私は改めて申し上げます。フランスはその責任を認める義務がありました。フランスは過去に背いた人道的遺産に忠実であるためにあらゆることを行う義務があります。フランス国内において、信念や信仰に関わらず全ての人に毅然とした、自由で安全な生活を保証するためにあらゆることを行わなければなりません。

同胞のユダヤ人の心を締めつける心配事や時に見舞われる苦悩を私は知らないわけではありません。ユダヤ人の記憶は、その長い歴史の中で、ナチスの虐殺の恐怖を知る前に、四散させられ、迫害を受けたある民族の痛ましい記憶であります。必要な場合は、この受けた傷だけで、存在が最も守られている国の必要性を正当化することができます。こうした意味で、ナチスの恐怖を証言し平和活動家となったエリ・ヴィーゼル (Elie Wiesel) 氏は、まさに以下のことを書くことができました。「ユダヤ人はイスラエルの外でも生きることができるが、イスラエルなしでは生きることはいかなる場合でもできないだろう。」フランスと友好国であ

るイスラエルは、安全で認められた境界線の中で、パレスチナ人やイスラエルに住む全ての民族と同様、平和で安全な生活を営むことができることを当然のことながら熱望しているのです。

ご出席の皆様、

私はアウシュヴィッツ強制収容所解放の60周年を祝う式典に出席するために、明後日ポーランドに行きます。600万人の大人と子供、つまりヨーロッパに住む4分の3のユダヤ人がそのナチスの強制収容所で亡くなりました。他者に対する憎しみと拒否によって永遠に命を奪われた全ての人々の記憶に忠実に、我々の子供たちのために、統一したヨーロッパ、平和な世界、正義・自由・他者への尊重のある未来を作っていきたいと思います。

思い出までも壊された全ての人々を我々は忘れません。

ありがとうございました。

註

- 1) 「ショア」(もしくは「ショアー」、Shoah)は元来、ヘブライ語で「災厄、破壊、悲嘆」を意味する。1939年から1945年にかけて、ナチス政権下のドイツは、多くの共犯者とともに600万人にも及ぶヨーロッパのユダヤ人を殺戮した。その実態をあらわすため、1つの共同体がショアによって壊滅される場合に用いるこのユダヤ教祭儀用語が使用されることもある。しかし、一般的には「ホロコースト」として知られているため、本稿で筆者は、パリのショア記念館と引用文献に「ショア」が使われている場合をのぞき、「ホロコースト」を用いた。その歴史については、以下の文献を参照。渡辺和行『ホロコーストのフランス』人文書院、1989年、Jacques Fredj, *Les Juifs de France dans la Shoah*, Gallimard, Mémorial de la Shoah, 2011。ジョルジュ・ベンスサン著、吉田恒雄訳『ショアーの歴史』(文庫クセジュ)、白水社、2013年。
- 2) シモーヌ・ヴェイユ(1924～) アウシュヴィッツからの生還者。パリに生まれ、パリ政治学院卒業後、法務大臣を経て、ジスカール・デスタン大統領時代の保健大臣、欧州議会の初代議長や欧州議会議員、ミッテラン大統領時代の第2次保守共存政権の社会問題・保健・都市問題大臣、憲法院判事等を歴任。2010年からフランス・アカデミー終身会員。1974年に人工妊娠中絶の自由化を実現、その後も欧州統合の推進、人権、とりわけ女性の人権等に取り組む。シモーヌ・ヴェイユ著、石田久仁子訳『シモーヌ・ヴェイユ回顧録』、パド・ウィメンズ・オフィス、2011年参照。
- 3) 「名前の壁」の落成式、およびショア記念館の開館式については、以下の新聞記事を参照。Le Monde, 25 Janvier 2005, p.3, Le Monde, 26 Janvier 2005, pp.1-3.
- 4) 2005年1月25日の、ジャック・シラク大統領によるショア記念館における演説の邦訳は、本稿5-8頁参照。
- 5) ユダヤ芸術歴史博物館については、以下の文献を参照。F. De Saulcy, *Histoire de L'Art Judaique*, BiblioLife, LLC, 1858. *Guide des collections*, Musée d'art et d'histoire du Judaïsme, 2003. *Guide du patrimoine Juif parisien*, Parigramme, 2003。松岡智子「ユダヤ芸術歴史博物館とパリ・マレ地区」(『倉敷芸術科学大学紀要』第18号、15-26頁)。
- 6) 「正義の人」あるいは「諸国民のなかの正義の人」とは、元来、ユダヤ人の伝統において、良心のある非ユダヤ人を意味していた。ここではホロコーストから自らの命の危険を冒してまでもユダヤ人を守った非ユダヤ人を表す称号である。1963年より、イスラエル最高裁判所判事のひとりを務める委員会が「正義の人」の称号を授与している。「正義の人」と認められた者の氏名は、ヤド・ヴァシェムの「正義の人の庭園」にある「名誉の壁」に記載され、その業績は永遠に記録される。

- 7) 10万枚もの「ユダヤ人登録カード」は、1940年末から1944年夏の間に作成された個人カードと、1941年から翌年の春にかけて作成された世帯カードの2種類がある。後者には氏名・生年月日・出生地・性別・国籍・職業・現住所・15歳以下の扶養家族・障害の有無・身分証明証番号などが記入されていた。詳細は以下の文献を参照。渡辺和行，註1の前掲書，169-173頁。
- 8) ヤド・ヴァシエムは、1953年エルサレムに作られたホロコースト記念館である。ヤド・ヴァシエムは旧約のイザヤ書からとった言葉で、「名前と記憶」という意味である。2005年3月、40か国の首脳とアナン事務局長が、ヤド・ヴァシエムに新たに建設された新ホロコースト博物館の落成式に参列した。
- 9) ショア記念館については、以下の文献を参照。Jacques Fredj, *op. cit.*, pp.190-201. *Guide du patrimoine Juif parisien. op. cit.*, pp.205-207.
ウェブページ www.memorialdelashoah.org/
- 10) 本稿8頁参照。
- 11) イスラエルによる、パリのショア記念館計画に対する闘いについては以下の文献を参照。トム・セゲフ著，脇浜義明訳『七番目の百万人』，ミネルヴァ書房，2013年，512-513頁。
- 12) パリ15区ネラトン通り8番地にあった冬季自転車競技場<ヴェル・ディヴ> (Vel d'Hiv) 跡地は、エッフェル塔とその先にあるケ・ブランリー美術館の近くにあり、小さな碑銘には次のように記載されている。「1942年7月16日から17日にかけて、1万3,152人のユダヤ人がパリやその近郊で検挙され、アウシュヴィッツに移送されて殺害された。かつてこの地に建てられていたヴェロドローム・デヴェールには、ドイツ占領軍の命令により、ヴィシー政権下の警察により、1,029人の男性、2,916人の女性、そして、4,115人の子供たちが非人道的な条件の下で収容された。彼らを救助しようとした人々に感謝を。ここを通り過ぎる人々よ、決して忘れるな」。
ヴェル・ディヴ事件に関する小説や映画で、我が国に紹介されたものとしては、タチアナ・ド・ロネ著，高見浩訳の『サラの鍵』（新潮社，2010年）や、2010年に全国ロードショーで上映されたローズ・ボッシュ監督による「黄色い星の子供たち」があり、反響を呼んだ。
- 13) シモーヌ・ヴェイユ，註2の同掲書，260頁。
- 14) 同上，261頁。
- 15) 2006年6月14日，ショア記念館の「正義の人の壁」設置の際の開館式における，エリック・ド・ロスチャイルド記念館総裁，ベルトラン・デラノエ・パリ市長，イスラエルのエフード・オルメルト首相，フランスのドミニク・ド・ヴィルパン首相の演説の内容については，註9のウェブページに全文が掲載されている。
- 16) ロバート・バクストン著，渡辺和行，剣持久木訳『ヴィシー時代のフランス』（柏書房，2004年）参照。1972年に出版されたこの著書は，対レジスタンスの輝かしい神話を崩し，従来のヴィシー像にコペルニクスの転回をもたらした記念碑的研究として，フランス知識人に衝撃を与えた。また，近年のホロコースト研究については以下の文献を参照。ダン・ストーン著，武井彩佳『ホロコースト・スタディーズ』，白水社，2012年。
- 17) シラクの講演原稿を担当し，後にサルコジ政権下において文化・コミュニケーション大臣を務めた（2007-2009），クリスティーヌ・アルパネルの証言による，*Le Monde*, 26 Janvier 2005, P.6参照。
- 18) シモーヌ・ヴェイユ，前掲書，266頁。
- 19) ヘブライ語で「思い出しなさい。忘れないで」を意味する。
- 20) クロード・ランズマン監督による映画「ショア」は，1985年のフランスの映画であり，製作は1974年から11年の歳月を費やした。日本での公開は1995年，東京日仏会館で行われた。ホロコーストの生還者，元ナチスのメンバー，収容所周辺の村人たちによる証言だけで構成された，9時間30分にわたるドキュメンタリーである。

なお，本文中の図版は以下の文献から複写し，それ以外は筆者撮影によるものである。

図2・8（199頁），図9・10（197頁），図12（198頁）（以上はJacques Fredj, 註1の前掲書），図3・4・5・6・

7・11（以上は*Plan Guide, Mémorial de la Shoah*）.

本稿は、独立行政法人日本学術振興会平成26年度科学研究費補助金〈基盤研究（C）〉の交付に基づくものである。

Place of memory – Around the Shoah Memorial in Paris

Tomoko MATSUOKA

Collage of the Arts,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2014)

In this paper, the outline of the Shoah Memorial, which opened in the Marais district of Paris in January 2005, and the course of events before the opening of the museum are first explained. Then it discusses how deeply former French president Jacques Chirac was involved in the establishment of the museum, and what the Wall of Names and the Wall of the Righteous in the museum stand for.

On the Wall of Names, which was built before the opening of the memorial, there are the names of about 76,000 Jews living in France who died in the Holocaust from 1942 to 1944. On the other hand, the Wall of the Righteous, which was inaugurated in 2006, lists the names of about 3,400 people called “righteous persons” who saved three quarters of the Jews living in France on the verge of annihilation due to the Vichy government and the Nazis’ occupation. These two walls stand for darkness and light in the French history during World War II.

When addressing the 53rd anniversary ceremony of the Vel’ d’Hiv incident, which was held on July 16, 1995, Chirac became the first French president who officially recognized French involvement in the crimes against Jews in the country. But he also attended a ceremony in the Pantheon in January 2007 to express his respect to “the righteous French.”

This paper points out that Jacques Chirac, who obliged himself to memorize the historical events, fulfilled that obligation only after he squarely faced the Walls of Names and the Walls of the Righteous, which are likened to the dark and bright sides of the history, respectively. A Japanese translation of Chirac’s speech at the opening ceremony of the Shoah Memorial is attached at the end as an annex.